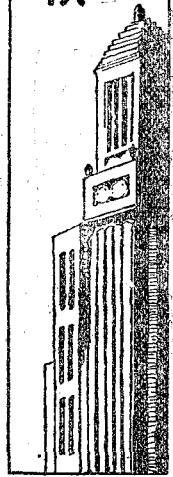


路政春秋



注 意

本欄は讀者諸君の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻撃に涉らざる限り奇想天外的の寄稿を望む。一文は四百字位にて取捨は編輯子に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

立つなステツプ

ふさぐな出口

之は「一列順に乗りませう」と云ふ標語と共に東京市の到る所に掲示された交通道徳訓練の爲めの標語である。至極適切な標語である。電車やバスにわれ勝ちにと車待つ人の先着あるにも拘はらず、横から飛び乗る不徳漢の多きと「おたまじやくし」乗り「おたまじやくし」が池尻に群棲して居るが如き我儘乗客が殆んど總ての車中に見らるる光景とは心ある乗客に厭氣と嘔吐を催さしむることである。「精神總動員運動」も「新體制運動」も「神ながらの道」

の普及も「生長の家」の宣傳も、先づ此不徳我儘な交通状態を改善せしむべきである。さるにても電車やバスの運轉配車上「めだか」運轉は先づ以て自戒すべきことであらう。

道は遠からず隣組

新體制運動に缺くべからざる底力となるべき機關は「隣組」であらう。地方自治制度の制定當時から此「隣組」を法制化し發達せしめて來たなら、地方自治團體も今日の如き状態に止まらざりしならんと思はる。抑も隣組生ひたちの歴史を見るに孝徳帝の白雉三年四月に五保の制が布かれたのが濫觴である。五保の制にては五戸を以て

一保とし保内の防犯、遺児の收養、桑樹の播殖などが其の仕事とせられ、隣保共助の精神が昂揚せられて居る。此制度は莊園の發達と共に行政組織としては破壊せられたが、庶民生活上に深く根を下ろしたのは亂世時代の爲めである。京都の常會が最も發達したのは、戦火十一ヶ年に及んだ「應仁の亂」の結果と謂はれて居る。其後豊臣秀吉の時代五人組の掟書が定められ、徳川幕政時代に及んで急速に發展した。此江戸時代には互助の精神の外に上からの警察の仕事も課せられて、浪人の取締や邪宗門禁止の具に供せられ、組員の連坐責任も規定せられて漸く上意下達の色彩を帯ぶるに至つた。明治二年維新の際五人組制度は廢止せ

られたものの、千三百年間の傳統慣習は災害に對する自警機關として、或は隣祐親睦の機關として將又、互助機關として實際的存在を繼續し來つた。昔時大化の政政に採用せられた此隣組が奇しくも、昭和の今日再び取り上げられ、選舉肅正、農漁山村の不況時代の經濟更正、道路の修理愛護、出征歸還兵士の送迎、貯蓄獎勵、勞力奉仕等々の運動は勿論、防空訓練、廢品回收、共同作業等多方面に涉つての活動が要求せられたのである。更らに新體制運動上「上意下達」「下意上達」の機關として利用せらるべきは、今更ながら明瞭に知らるる所である。獨逸の地方制度を母法としての市町村制も此隣組の無視に依りて、却つて自治的精神の眞の發達が阻止せられたものではなからうか。道を北歐の遠きに求むるのみにて其の近きにあるのを等閑視したるの結果が今日の地方自治團體上に顯現せられたものであらう。

道ばたに匂ふは

色濃き紫草

千葉縣印旛郡遠山村の植物研究家吉倉氏成田山公園の八木氏が、野生植物の藥草採集の途すがら三里塚牧場附近で、房總地方には珍らしいムラサキ科紫草の繁殖してゐるのを發見し、之を採集して成田山公園に移植したと傳はる。此紫草は江戸時代『江戸紫』として流行した機業の染色材料はこの根から搾りとれる野生藥草で、時の幕府徳川八代將軍吉宗公が部下に命じ、吹上御苑に染殿(染色試験所)を造り、大いに染色を研究獎勵したもので、房總地方の草原では見られない野生の珍草で草丈二尺餘り白き花が開くのである。(鮎太夫)

富士の裾野に謎

としての櫛の枯死

富士裾野演習場隣接の玉穂、原里村内を逍遙すると櫛數百本が一齊に枯れ始め、綠

深き夏木立の中に秋の蕭條たる光景を思はせる奇觀を呈して居る。瀧ヶ原演習場北方玉里村一本木塚附近、幅二、三百メートルから始まつた枯死地帯は、次々に南方に延び擴まり、同村上合、中村、八町地、原グミ澤、立道部落を経て原里村を襲ひ、同村永塚北畑、川島田、保土澤、杉名澤、神場を嘗め、幅員千メートル位に擴大されて御殿場線で止つてゐる。枯れ始めたのは七月十八日頃からで、先づ葉が枯れて落ち、次に幹木が枯れるもので、現在判明せるも玉里村約五百本、原里村百五十本の損害はおそらく十數萬圓に上るものと見られてゐる。この枯死の原因がどこにあるか、數年前にも隣接印野、富士岡兩村の櫛が枯かされた事があり、當時地元では演習による枯死として専門家によつて研究されたが、遂に眞因をつきとめる事が出来ず第二回目の被害となつたもので、兩村當局では今尙演習の被害といふ觀念を捨てず、軍當局に陳情する一方縣山林課員によつて演習

究明に努むべく縣當局へも陳情する事となつたと傳へらる。此謎の解くる日の近からんことを祈る。

(駿南生)

珍聞奇譚 (81)

○豪華な圓柱と古代人聚落の跡 太平記に名高い「片野の春の櫻狩」で有名な大阪府北河内郡牧方町大字田口字南山に古代人の聚落の跡が発見された——田口神社境内地で牧方町から長尾に至る大阪府道の一部は洪積層からなり、部落の共同土取り場となつてゐたが、昭和十三年彌生式土器と石器時代の遺物が発見されたので、府では一部保存方を命じてゐたが、此程町民が土取りの際石器がゴロ／＼と轉り出したので、府社寺兵事課員が現場に駆け付けた處、彌生式土器や石器の外に附近一帯で約二十本の圓柱の跡が発見された。直徑二十程であり、炭化してゐるが、少くとも三千年前の建物の柱と推定され、一戸六平方メートルで眞四角となつてゐた處から、記録による當時の圓型

獨立小屋と比較すれば正に御殿の跡とも見られ、相當の聚落の跡と判つたが、權威者について研究することとなつたといふ。

(大朝)

○大和川河原に「大都市」の跡 過ぐる日大阪住吉區平野本町五丁目齒科醫大崎辰三氏ら五人が、前記瓜破村地先大和川の高野大橋の下流三百米の河邊で魚釣り中、河原に土器が散亂してゐるので持ち歸り、考古學の權威として知られてゐる府立八尾中學教諭山本博氏に鑑定してもらつたところ、立派な有史以前の彌生式土器なので、雀躍して喜び、早速現地で調査したところ、河床から十萬平方メートルに及ぶ包含層が露出。石小刀三本、石庖丁二十個、石劍四本精巧な手爐形四個、土蓋高坏形壺形を含む櫛目紋、葉紋の彌生式各種土器の完全なもの六百個も現れ、殊に考古學界渴望の赤色の酸化鐵で繪を描いた彩文土器もあり、さらに石槍、石斧、石鑿、石棒などで當時の日常生活ですでに火を使用し、湯を沸し穀物を

炊き、果物をむいて食べた三千年前のわが大和民族の高度文化の農業集團生活が推定されるにいたつた。

山本氏はその研究を考古學雜誌九月號に報告發表することになつたが、引きつゞき輝かしく古代文化の大都市の體系追及のため系統的調査をつゞける。山本博氏は語る。

「包含層の廣大なこと、數の多いことは恐らく日本一でせう。とくに壺形土器の一つに肩と口縁部の内側に赤色の酸化鐵で、曲線波狀の繪が描かれた彩文土器が美しく原型を止めてゐるなど、學界にとつて稀有の收穫です。長さ一、二寸の石小刀は内側に刃がつけてあり、竹の柄でも結んで果物などむいたと思はれるし、石劍四本は長さ一尺、幅一寸五分で、その雄大さと完全さは日本隨一でせう。石庖丁は柄をつけて穀物を刈りとつた農業生活の代表的のもので、土器のかげに穀痕がはつきり残つてゐるのは木の葉痕が

あることゝともに、秋の收穫を終つた農閑期に土器の製造に従事したものでらしく、その勤勉さが偲ばれる。手盥形土器は先年富士裾野の出土品より古く、原始素材のなかに精巧な藝術味が加はり、穀種子を貯藏したり、内側が焦げてゐるところから、火の保存に使用したものらしい。非常に多數の土蓋があることも生活の清潔さが思はれる。いづれも彌生式系の遺物だが、石棒のごときは頭部に格子自紋の彫刻があり、これは縄紋式のもので、當時アイヌ族との物々交換を物語る資料となり、この當時の文化人の大集聚都市だつたことが推定されます。まだ調査の緒口ですが、まだまだ興味ある貴重な資料が出てくると思ひます」

飛行自動車の登場

飛行戦車の發案者がアメリカであれば、飛行自動車の發案者もアメリカである。飛行自動車を彼達は「エロウビル」といつて

この出現を禮讚してゐるといふ。「エロウビル」の名附け親は米人ワルド・ウオーターマンといふ人である。これは仲々面白い考案で、その構造は、鐵骨と輕金屬の薄板をもつて作つた流線型の車體にガラス張りの室を作つてこの中に二つの並列した座席を設けてゐる。この運轉は自動車の構造とよく似てゐる。そして座席の後方に發動機をつけ、これでもつて車體の背中につけた推進式プロペラを同轉させる。車輪は前方に一つ、後方に二つで前方の車輪で地上疾走の場合に前進の方向を變へることは普通の三輪車の場合と同様である。車體の尖端部に冷却器が裝置してある。地上往來用の乗物としてこの場合、この飛行自動車の時速は百キロメートル以上ださうである。飛行の目的の爲には二つの翼があつて之は三分以内に車體の上方左右に廣げることが出来る。又此飛行自動車には尾翼なく、縦の安定性は左右の主翼を車體と垂直になるやうに廣げずに、適當の角度で其尖端が後方

に向ふ様廣げ、飛行の際の平衡を保つ様にしてある。其左右主翼の尖端には鐵骨羽布張の方向舵がついてゐて、これが昇降蛇の役をつとめる。此全幅は一・六メートルで此飛行自動車の自重は八八〇・四キログラムである。このエロウビルは實際に飛行し、またアメリカの航空當局の認定をうけてゐる。百馬力の發動機をつけて最高一九〇キロメートルの飛行時速を出し地上において七七キロメートルの時速を出したのが最初の試験成績だつた。上昇降度四・五〇メートルといふことも可能とされ、空のタクシー時代はもうやつて來たのである。またこの飛行自動車の一時間の消費燃料は十四リットルで、その消費量は飛行の場合地上を疾走する場合は同量である。そこで九十一リットルの燃料を積めば約六五〇キロメートルの距離に飛行兼疾走をもつて到着することが出来るのである。近代戦争にはこれは大きな革命をよび起すものとなる。空からの人間降下隊、空からの戦車降

下隊——そしてさらに空からの自動車隊降下は「方空の機械化」として驚嘆すべき威力を發揮してゆくだらうと。(朝日)

地方長官の長任期

を望むべきか

○政黨政治の開始によりて官吏殊に地方官の交迭甚だ頻繁に陥り遂に治績の見るべきものなきに至つた。官界の弛緩も此に職由す昔時に至つては千家男の東京府知事は十ヶ年大森男は京都府知事十五ヶ年高崎氏は大阪府知事十ヶ年周布氏は神奈川縣知事十ヶ年服部氏は兵庫縣知事十六ヶ年間であつた固より同一職務に在ることの長きを以て必しも尙しとするものではないが、其地方の事情に何等の認識を得られざるに轉々として其任地を替ゆることの弊あるは、實に嘆ずべく憂ふべき事象である。潮樞密顧問官の言はるゝ如く地方長官は相當の年配の者を適任とすべきものではなからうか。内相は談られたとか。

「散兵壕」の揭示

煮干か焼干か

價格形成委員會の公定價格裁定には時々奇想天外的なものが飛び出す。最近も漁師やお内儀さんを呆れさせた、夫れは千葉かや青森にかけて、地方海産の大宗たる鰯の

煮干は市價百匁四十八錢、燒干は六十七錢だつたものを公定價格は逆に煮干六十七錢燒干四十五錢と發表された。燒干の方が美味くて滋養も豊富だし、生産の費用や手數も餘計にかゝる、其筋に大舉陳情してみると事情が判らなかつたとの事であると事實か。

X

X

X

宋に富人あり、天雨り牆壞れぬ、其子の曰く築かされば必らず將に盜あらんと其隣人の父も亦云へり、暮れに果して大に其財を亡ひぬ。其家甚だ其子を智として隣人の父を疑へり。此の父の説者は當れり、然るに其疑を見しは則ち知ることの難きに非らず知を處する則ち難し

(韓非子)